

日本

ハンザキ研究所ニュース 2008(1) : 通巻 24 号

発行 2008.1.31

〒679-3341 兵庫県朝来市生野町黒川 292

Tel/Fax (079)679-2939

E-mail : j-hanken@sasayuri-net.jp

日本ハンザキ研究所 栃本 武良

.....

ハンザキのカエル・ツボカビ症について (2)

当誌 22 号でオオサンショウウオのツボカビ症について書きました。まだ刊行する前だったのですが、12 月の 18 日に産経新聞の自称ハンザキ記者・谷下さんが取材に来られました。プールに保護中のオオサンショウウオを取材に来たのですが、色々な話の中で 11 月 16 日の朝日新聞の「オオサンショウウオでツボカビ確認」という記事に触れました。当日は豊岡市の出石川におけるオオサンショウウオの試験放流日だったのですが、実は 1 検体から陽性反応が出ていたのです。専門家の判断を仰いで放流はゴーサインが出たので、皆サア放流だ！と気持ちがそちらの方へ向いてしまっていたのでしよう、誰一人として出石川のハンザキは大丈夫なのか？という質問をしてきた人はいませんでした。

一昨年にアジアで初めて日本のペットから発症が確認されてから、この 1 年間は報道各社が競ってツボカビ・キャンペーンを張ってきたのですが、これは一度野外で発症したら取り返しのつかない状況になるからです。日本では両生類や爬虫類をペットとしているマニアが無数にいます。国外産のこれらのペット類からの発症が最も恐れられており、マニアへの警鐘を鳴らすことが急務と研究者も考えての情報提供が行われてきていたのです。マニアと言っても児童生徒などの低年齢の場合もありますので、周知徹底することは困難なことかもしれません。ですから、私たちにしてもツボカビの怖さをまだまだ声を大きくして叫んでいかねばならないと思っています。

谷下記者との話の中でプールのハンザキは大丈夫なのかという質問が出て、検査中であることや出石川の場合もきちんと対応していることを話しました。また、マニアだけでなく研究者の目玉の数は少ないので、多くの一般の方々の関心をそれぞれの身近な環境へ向けさせ、異常なことがあれば連絡をしてほしいからです。さらに、環境調査会社の調査員や私たち両生類に携わっている者としては、これらのことを常に念頭においていなくてはならないのです。マニア・一般人・専門家が全て注意をしていかないと取り返しのつかないことになってしまいます。ですから、私は機会あるごとにより大きな声で叫んでもらえるマスコミの皆さんには情報を提供していきたいと考えています。今回の産経新聞の全国版に掲載された記事を見て、各社から情報提供が公平でないとの苦情が出たそうですがすでに 1 か月も前に報道されたことであり、これに注目した記者の取材努力の成果であったと私は思います。その後、数社が取材にみえましたので理解していただけたと思います。

竹村国宏君とオオサンショウウオ

昨年(2012年)の10月21日に黒川小中学校の同窓会が開催されました。当誌21号でも少し触れましたが、平成4年に刊行された小学校の閉校記念誌「くろがわ」には4年生としての国宏君の感想文が掲載されていました。「4年間には多くの人々との出会いがあったが、中でも私との出会いは生き物好きの彼にとっては幸せだった」といったことが書かれていました。初めてこの作文を読んだときには、僅かな時間だけの話(写真1参照)をしたのみであったのに、と私の方もうれしい気持ちになりました。そして、このマンガ(右の)のことを思い出したのです。これは黒川小学校通信6号に使われていたものを、先生から頂いて大切にしまっていたものです。なんの変哲も無いこのマンガのうれしいところは、私とオオサンショウウオとの信頼関係を国宏君が感じて表現してくれていたことです。

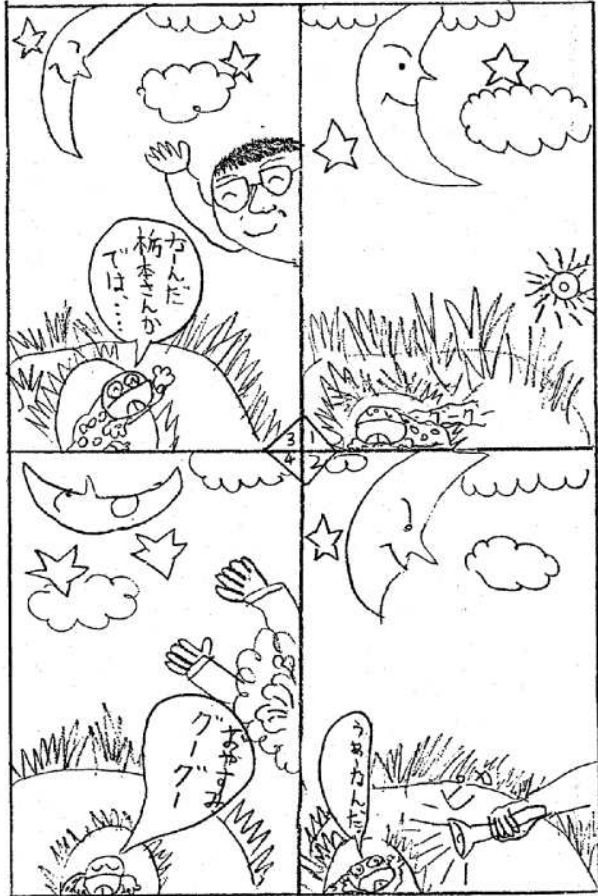
彼はハンザキ研から3kmほど奥になる市川の支流長野川の最奥部の自然の豊かな環境で育っていました。その時、家の前の小川で30cmほどのオオサンショウウオを捕まえて飼育していると話してくれました。私は、特別天然記念物の動物ですが子供たちにとっては身近な環境に普通に生息している「普通の生き物」の一つに過ぎないのだなと思いました。そして、咎めることをしないで、体の模様をスケッチしておくといいなと奨めました。当時は個体識別の手段として斑紋が唯一のものであり、彼が大きくなった時にそのオオサンショウウオを確認できるかもしれないからねと言ったのです。

スケッチが残っているかどうか聞いていませんが、昨年の3月にお父さんの剛さんから、家の前の溝をサンショウウオが歩いていたので風呂桶水槽に谷水を掛け流しにして入れてあるので登録するなら来て計測して放流してくださいとの話がありました。登り一方の山道を30分かかって自転車を押しながら出かけましたが、帰りは10分もかかりませんでした。60cmほどの個体だったのですが、15年前に国宏君が飼育していた個体かもしれません。スケッチが残っているといいのですが？

そのお父さんには現在、プールのオオサンショウウオの管理を毎日してもらっています。先日、何気なく国宏君はどうしていますか？と聞いたところ姫路の神畑商店で熱帯魚の飼育のアルバイトをしているということでした。神畑さんは姫路市立水族館の開館前からの長いお付き合いでしたので世間の狭さには驚かされました。年末の休みには国宏君が弟と一緒にハンザキ研を訪ねてくれましたが、小学校の時の面影が残っていてすぐにわかりました。頑張って一人前の飼育係になるように励ましておきましたが、竹村家にとっては長男ですから家に戻ってきてほしいことでしょう。国宏君のおじいさんは腰も曲がりかけていてかなりのお年のようですが、まだ現役のハンターでずっしりと重い鹿の角を頂きました。シカが増えて作物を食い荒らす被害が増えているそうですが、ハンザキ研の周りの山の中から警戒の叫びを浴びせかけられることも再々です。口笛で応答すると更に高い警戒音を立てて姿を消します。この豊かな自然環境と若い国宏君たちが生きがいを見出せるような村づくりができればいいのですが・・・

水族館の栃本さん

国宏作



アンコ淵の黒主の冬越しは？

12月26日からのダム放水では、急激な水温変化が起っている。4～5度Cからいきなり10度になり、気温との差も大でモウモウたる水蒸気が立ち上っている。巣穴の中で子守り中の黒主は12月23日以来一向に姿を見せない。幼生たちはそろそろ川の中へ分散していく時期だが積雪がひどいので川に下りていく気になれないのでまだ未確認だ。

水温10度といえばハンザキにとっては快適なのではないかと思うが、姿を見せないのはなぜなのだろうか？穴の周辺ではイシガメのオスたちが懸命にメスの後を追っている。落ち葉溜りに潜り込んでしまったメスを見失って周辺をウロウロしている、冬眠をするどころかオスたちは自らのDNAを残すべく懸命な生態を見せてくれる。

山ごもりと食生活

山にこもっての生活などと言うと、ハンザキ研からまだ山奥に生活している方々に失礼になるかもしれないが、一応街からやってきて住み着いてみると、やはり山の中で生活するという感慨にふけることになってしまうのはやむおえぬことでしょう。周辺には人家はもとより今時の若い人には生活の必需品？のコンビニもスーパーも存在しない環境である。

ここで俄かな一人暮らしをすることになって、まずは食うことが最大の難問となるのは当然だろう。生きていくためには食わねばならないのであり、時間が来れば腹が減ってくるのも健康のバロメーターでもある。心筋梗塞ですと内科医に診察をしてもらったが、規則正しい食生活をするようにとのアドバイスであった。飲み過ぎないようにビール2本にきめて規則正しくやっていますという減らず口にドクターも沈黙、3食主食がビールという食生活の良否はいかがなものでしょうか？

副食は一応栄養のバランスを考えることとして、できるだけ色々な物を食するようにしている。しかし、一人分の料理を作るのは難しく、結局数回分の分量になってしまうので、飽きてしまうことになる。最近の傑作は冷凍納豆であった。賞味期限の迫ったパックを開けてネギ・カラシ・醤油を混ぜて冷凍したものは、酒のサカナに最高だった。オススメ！

雪 国

平成 17 年の冬には 12 月末に大雪があった。クリスマスイブに来所したら、ハンザキ橋の手前側が除雪車によって掻き退けられた雪の山になっていた。山を越えると新雪が 70 ㎝も積もっておりこれをラッセルして玄関にたどり着いたのだった。18 年の正月には融雪洪水が見られて一晩中、川底をゴロゴロと大きな岩が転がりつつ流されていく響きが伝わっていた。次の 18 年から 19 年の冬には全くといっていいほど雪が無く暖冬そのものであった。この冬も年内には積雪が無く昨年同様の暖冬かと思っていたら、正月以降は降らない日がないほどの降雪続きである。一昨冬のようなドカ雪は無いが、連日の降雪で日陰の積雪は 1 尺にもなっている。

地域の方が小型ガソリン・エンジン付き除雪機を使って通り道だけは確保してくださったが、広い校庭は雪で銀世界となっている。研究所と称している宿舎と校舎の間や校庭の南端にあるオオサンショウウオ保護プールまでが主な通路であるが、プールの見回りだけでも一周するとかなりの距離になる。川の見回りもしなくてはならないし、獣たちの足跡を求めてうろつきたくもなるので大変な日課になってしまう。いい運動になるかもしれないが、滑らないようにしないといけない。有線放送でも診療所がお休みの日であっても骨折の場合には対応しますと言っている位で、けっこう骨折事故があるのだろう。私もプールサイドのコンクリートに薄く透明に凍結していたのに気が付かず見事に尻餅をつき尻尾がしばらくうずいた。以後はへっぴり腰で注意しつつパトロールしている。

雪があると獣の足跡がみられる。獣だけでなくセグロセキレイの右へ左へと歩いた跡は現認して確認したが、プール周辺にはオオサンショウウオの餌のアマゴやニジマスを狙って飛来するアオサギの大きな足跡も残っている。プール横に飛び出しているアマゴの死体をハンザキの目の前に落としてやると水温 2～3 度でもパクッと一瞬で呑み込んでしまう。冬眠してくれると調査も楽になるのだが、こちらの都合には合わせてくれない生態である。

シカの足跡は分かるが、他の足跡はなかなか難しい。積雪の上をあまり深くまで踏み込まずに歩いているのはイタチかリスなどの体重の少ない動物だろう。ウサギの場合には前足と後足が二本ずつ交差して続くのでわかるが、土手を這い上がってきてガードレール沿いにハンザキ橋を渡り橋の下へと続いていた足跡の主は分からなかった。鋭い爪あとが見て取れる足跡もあったが、その内に専門家に判断を仰ぐつもりだ。

校庭に山積みにした伐採木や刈り取った草も雪で覆われているが、2 つの穴が開いて足跡がつながっていた。冬越しのねぐらに何者かが使っているようだ。プール横の山からの小道にも幾く筋もの足跡が付いていてせっせと毎晩のように通ってきているものがあるようだ。監視カメラがほしくなってきた。水中のハンザキの行動も 24 時間連続撮影によって生態、特に繁殖生態の行動解明を試みたいと考えているところです。一晩くらいなら徹夜もできるが、何日もは続けられない。暖かい部屋でアルコール燃料を補給しつつモニターを眺めていたいものだ。この冬はたつぷりと雪国の生活を味わうことができた。



写真1 調査用具の話 (1991.11 右端が国宏君)



写真2 小型除雪機で竹村由雄活性化協会長



写真3 綺麗なキロスズメバチの巣 (2007.10)



写真4 被害を受けた巣 (2007.11 成虫が数匹見える)



写真5 酒の肴にぴったりの冷凍納豆



写真6 後日、更に食われた巣、犯人は？

ハンザキ研日誌 2008年1月

- 元旦：静かな一日を山の中で過ごす。初めての越年でした
- 4日：国交省豊岡河川国道事務所からツボカビのサンプリング・キットを受け取りに来所
午後にはアコバスで山を降りる
- 7日：県・高齢者大学いなみ野学園で4年目の講演（加古川市）
- 8日：GS-256(~27日)
：読売新聞・増田記者取材に
- 10日：姫路商工会議所コムサロン21で・NPO法人申請のアドバイスを受ける
- 11日：能見税務事務所にて能見税理士にNPOの顧問依頼（和田山町）
- 13日：一日降雪、雪の中を大阪府箕面の人がハンザキを見に来る
：キタイ設計・柿木氏ウエダー4着返納に来所
- 15日：プールサイドで滑って尾てい骨を打つ
- 17日：産経新聞・谷下記者取材に来所
- 18日：朝、積雪 35%
- 20日：一日中降雪、午前10時ころアンコ淵に黒主ではない個体を発見したが岩下に逃げ込まれる。ついでに橋桁下の食害を受けたキイロスズメバチの巣を撮影する
- 21日：積雪 40%、長靴が埋まるので雪かきをしたが、なかなかの重労働
- 22日：アコバスで食料の買出しに
- 23日：共和コンクリート菅原氏来所、出石川の工事で
：NPO化会議 10名
- 26日：姫路市立水族館調査で来所（増田・竹田両氏 GS-257）
：ウエスコ4名保護センターのハンザキ健康診断に来所、大雪で延期、雪掻き実施
：黒川地域活性化協議会、公民館にて16名、夜は新年会となる
- 29日：揖保川水系流域委員会・たつの市にて、日工専の学生傍聴
- 30日：朝来市議会・正副議長に面談、NPO顧問就任依頼（和田山町にて）
- 31日：京大院・田口勇輝氏来所、オオサンショウウオの兵庫県下分布情報別刷りとカエル・ツボカビデザインのバッグ受贈

ハンザキ所長のツブヤ記録

今年も早くも1か月が過ぎた。つい先日山で年越しをした感慨も過去のものになっている。12月には積雪になるほどの雪が無かったのに、正月になってからは連日のように降雪が続く。街から雪遊びを目指しての家族づれが楽しそうに雪球を作っては投げ合っている。道路は除雪車が活躍してくれるので問題は無いが、掻き退けられた雪の山は各自が掻き退けなければならない。シンシンと舞い落ちる雪を眺めつつのサケは旨いものだが・・・